

汲古一心

『春星秋霜』—貞香会の歴史—

一方、戦後に一度大同団結をして再建に邁進した書道会は、その日本書道美術院から少しづつ離れて戦前の名称を名のり、あるいは集りあるいは組替えをして、いくつかの特色を持つものとなつていった。

日本書道芸術院・謙慎書道会・東方書道会などもその主なるものであったが、その間に元東方に属していた木村ト堂氏がまた別に旗幟を掲げて新興書道会を結成したり、手島右卿氏は比田井天来先生の学統を率いて書人団を結成、金子鶴亭氏も現代文学を書にする創作会を創めるなど、逐次その旗幟の鮮明なものに集散があつた。またこれらを包括して毎日新聞社の毎日展が構成され、さらに日展の書道科も開かれるに及んで百花繚乱となり、昨今はほとんど定着したようにも見えるが、先般読売新聞の書道展開催もあつて、多少の異動現象がみられるようである。

このような時代の流れの中にあつて、貞香会も東方書道院に属し、その第二回展以後、今年の第二十五回展に及んで活動しているが、一時そのまま力を新興書道会にも貸して数年を経たが、人材養成の見地からこれは辞退して、時々毎日展にも協力したが膨大な人海戦術のような比例主義には抗しきれずにいるのが現状である。

ただどの団体では何をするのかといえ、東方は戦前から最も学問的なのか文人主義的な傾向も多くなって、会員の養成に適合しているようなのがこの団体に所属している理由なのである。しかし時に、書壇の中堅展・新人展、あるいは女流展などと呼びかけられれば、随時人選してどれにも参加し交流に力を惜まない態度なので、現代の書道会の一団として注目されてもいる。

今日のこの文献出版も多く、また教育も大学まで書道科のある時代の中で、ひとつの団体が歩んでゆくには、何としてもその団体を存在させる意義を持たなくてはならない。意義でも主張でもよい、とにかくどこかにその団体だけが持つひとつの特色、体質といったものがなくてはならない。

三千年以上も続いた厳然たる伝統のある書道の鉄則は維持されねばならないが、眼が二つ鼻はひとつが顔の定型といえども、ひと目であればA君、これはB君という風格があり異動がある。書の通則の範囲で何を書いてもよいが、力のある現在の団体を構成する人々は、みな筆勢にあるいは造形に、あるいは緩急の筆法に、会全体を流れる風格を示し、その風格を持ちながらおのずから個性もちゃんと表現しているのを見る。

わが貞香会は批評家の甲・乙・丙・丁、誰が何といつても譲らない風格だけは維持してきたつもりである。基本は古典を拠りどころとしているが、格調の低い、どこか俗気の漂うものを避けて一格毅然たるものを学ばんとしてきた。自然、作品の気品に注目し、会場の清爽たる気分は一步も譲らないもの、稚拙であつても掲げて愉しむに足る作品をと心がけてきた。

伝統一貫、いまや六十年の星霜が流れ去り、ご承知のように老素堂は衰素堂となり果ててきたが、身辺に俗書を置かないようにし、現代には現代の高い風格の書を作る信念だけは凜乎として持ちこたえてきた。

今年、会の六十周年を祝するといふ。うれしいことであり愉しいことである。その歩んだ六十年とは、あらましこのような次第である。

〔書範〕、昭和五十七年四・五月

〔筆間雑記〕中村素堂随筆集(昭和六十三年刊)より転載。



「無量寿」昭和四十五年